

# 外国語教育と異文化コミュニケーション —日本語とアラビア語の会話教育の視点から—

HANAN Rafik Mohamed

東京外国語大学

## 1. はじめに

人間の一日の言語行動のうち「話す」こと、つまり会話が伝達理解の基本的な手段であることは確かである。会話とは、場面があつてはじめて発生するものだと考えられる。その場面には様々な要素が含まれている。例えば、話し手と聞き手、両者の関係、両者の文化的背景、話題、態度、表情、非言語的伝達手段などが考えられる。そして異なる文化的背景を持つ話者の言葉の中には、異なる文化の特徴が出てくる。

文化には唯一絶対の定義があるわけではない。文化は、日頃私たちははっきりと意識しているわけではないが、生活のいろいろな場面で人々の行動の指針となり、司令塔の役割を果たして、それを他者との関わりのなかで実行に移すときに関わってくるのがコミュニケーションである(久米2005)。すなわち、当然、コミュニケーションと文化は互いに深く関係していて、相手の話し方・理解の仕方のルールを理解するには、まず相手の文化的行動体系を知ることが求められる。

青木(1999:40)は「異文化コミュニケーション」が、メッセージの送り手と受け手がそれぞれ異なる文化に属している場合のコミュニケーションであると説明している。現象としての異文化コミュニケーションは古くからあったが、異文化コミュニケーション研究はまだ比較的新しいといえるだろう。異文化コミュニケーション研究はアメリカで生まれて、日本には1960年代以降、ホール(1959)の『沈黙のこぼれ』をはじめ、アメリカの異文化コミュニケーション関連の研究が翻訳されたのをきっかけとして広がった。そのため異文化コミュニケーションを行うには英語を用いることが最も現実的であるとされ、異文化理解教育も英語理解教育を中心としたものが多かった。

一方、国際化が進むにつれて、異文化コミュニケーション能力を高

める必要が生じてきた。異文化コミュニケーションにおける誤解の原因の一つが情報不足である。なぜならば、情報不足はイメージの貧困化を生むからである。まさに、エジプトと日本とは、地理的にも遠く、互いの文化は異なったもので、情報不足が「エジプト人に日本語を教える」と「日本人にアラビア語を教える」ことを難しくしている。

本稿では、エジプト人日本語学習者と日本人アラビア語学習者とを扱うが、まず、両者は、互いの文化の異質性を自覚する必要があるだろう。そして、単語や表現、あいさつの一言に至るまで、その背景にある、考え方の違いや、国民性（性格）の違いも、同時に学習することが必要である。

本稿では、筆者が、エジプト人に日本語を教え、日本人にアラビア語を教える中で見てきた、異文化コミュニケーションの中での数例のトラブル、つまり、自文化と他文化の違いが基で生じるコミュニケーション障害の具体例を紹介し、解決方法を提案したい。

## 2. エジプト人日本語学習者側のトラブル

### 2.1 カイロ大学文学部日本語日本文学科の学習者

カイロ大学文学部の日本語日本文学科では、学習者の定員は1学年約20名で、圧倒的に女子学生が多い。入学の時の年齢は16歳から18歳と幅がある。学習者は日本語学科に入学してから初めて日本語と対面する。筆者はここで、1992年から2005年まで教えていた。

### 2.2 日本語会話教育

日本語教材として1年生と2年生には『みんなの日本語』を使い、3年生と4年生には「SFJ」を使った。SFJというのは筑波大学が編集した、Situational Function Japanese - by Tsukuba Language Groupのことである。

### 2.3 異文化コミュニケーションによるトラブルの事例の紹介

日本語の会話を学習するとき、学習者と目標言語との文化背景の相違から発生したトラブルの事例を7つ紹介する。

- ① あいさつ エジプトの気候は日本ほど変化がないためか、エジプト人同士のあいさつの中には気候や季節に関する表現があまり出て来ない。その代わりに「元気ですか」というあいさつがかなり頻繁に使われ、これが日本人に誤解される。日本人は久しぶりに会った

相手には元気かどうか尋ねるが、毎日会っている人に、毎回「元気？」と聞くのはおかしいのである。逆に「いやな雨ですね」という表現はエジプトでは信じられないあいさつである。これはイスラム文化の中では雨はアッラーからの恵みとみなされているし、その上にエジプトでは砂漠化が進んでいて、ナイル川があっても雨は貴重な存在だからである。

年末年始のあいさつでは、アラビア語では「よいお年を」と「明けましておめでとうございます」のあいさつの区別がない。それゆえエジプト人学習者が、年が明けてから「よいお年を」というあいさつを使うことがある。また年が明ける前でも（会話の終わりではなく）会話の途中で同じあいさつを使うことがあるので、日本人との談話が中断されることがある。

- ② あいまいな表現　日本語では物事を断るときに、「ちょっと」とか「いいです」などがよく使われている。エジプト人にとって、この「ちょっと」というフレーズがとても短くて聞き取りづらく、また分かりにくい表現である。また、「いいです」という断りの表現を「It is good」、つまり逆の「よい」という意味に解釈してしまう。
- ③ 週の初め　エジプトでは週の始まりは土曜日で、週末は金曜日である。それゆえエジプト人は日本語の「今週の土曜日」のことを「来週の土曜日」と言ってしまうのである。約束の日を決めるとき、どれほど大変なことになるか想像できるだろう。
- ④ 呼称　エジプトと日本では、人の名前への呼び方が違うのである。エジプトの場合はファーストネームで呼ぶことが普通である。それゆえエジプト人が目上の相手に対してもファーストネームで呼ぶことがあるが、それを日本人は失礼だと誤解する。
- ⑤ 「おめでとう」　エジプトでは「おめでとう」という言葉がよく使われる。アラビア語では「マブルーク」という。例えば、相手が小さなものを買った場合でも「おめでとう」の言葉が言われる。もしエジプト人がエジプトの「おめでとう」のつもりで「おめでとう」と言うと日本人には不自然に聞こえたと考えられる。
- ⑥ 「頑張って」　筆者が実際に次のような出来事に直面したことがある。入院していてこれから流産になる日本人のある患者に、日本語で「頑張ってください」と言ったとき、その患者が「何を頑張るの。流産することに頑張るの」と言って怒り出し、大騒ぎ

になった。そのとき筆者以外は全員が日本人で、全員がその患者を見つめているだけで何も言わなかった。エジプト人の場合は、大変なときに黙っていると非常識で、冷たい人間だと思われるので、必ず何か励ましの言葉を言う。そのような時にエジプト人日本語学習者は、ひとつの表現として「頑張ってください」をよく使うのである。しかし日本語の「頑張ってください」の使い方はアラビア語と違って、そのまま日本語に置き換えようとすると誤解を招く。この例は、異文化コミュニケーションを円滑に行うには異文化に対する理解がなければならないことを教えてくれるだろう。

- ⑦ 兄弟の数　もしエジプト人に「兄弟は何人ですか」と聞くと、日本人とは異なり、自分を入れないで数える。このこともエジプト人日本語学習者に影響を及ぼす。

## 2.4 考えられる解決方法

カイロ大学では、文化の違いによって発生する誤解を少なくするために次のようなストラテジーを使用した。

第一に、学習する表現の文化的背景を同時にできるだけ教えること、第二に、教科書の日本語だけに頼ってしまうのではなく、実際に日本語が使われている生の日本語の資料を学習者に見せることである。カイロ大学では、宮崎駿監督によるアニメーション映画や『サザエさん』、NHKの連続ドラマ『すずらん』などを見せたりした。つまり、異文化に接することによっていろいろな表現やものの考え方が違うことを学習者に実感させるのである。違いを学習者に実感させることが大切である。

## 3. 日本人アラビア語学習者

### 3.1 東京外国語大学アラビア語専攻の学習者側のトラブル

東京外国語大学アラビア語専攻は、新入生は毎年大体20名である。年齢は18歳か、それより1、2歳上である。この人数はカイロ大学日本語学科の毎年の新入生とほぼ同じである。

### 3.2 アラビア語会話教育

東京外国語大学では、アラビア語の会話授業のレベルを1から4まで設定しており、筆者と、シリア人の非常勤講師が担当している。前期(4月～7月)には、筆者がレベル2を担当し、後期(10月～2月)に

は、筆者はレベル1と3を担当している。

筆者が担当している会話クラスでは *Al-Kitaab fii Ta'allum al-'Arabiyya*<sup>1</sup>、*El-arabiya Bayna Yadayika*<sup>2</sup>、*Arabic*<sup>3</sup>や日本で出版された『こうすれば話せるアラビア語』<sup>4</sup>という教材を使い、また話題（トピック）を決めて語彙リストを学習者に配って、アラビア語で発表をしてもらうこともしている。そして担当しているすべてのクラスで、できるだけアラビア語の発音を練習させたり、アラブ・イスラム文化について紹介したりしている。

### 3.3 日本人の性格により発生するトラブルの紹介

エジプト出身の教師として日本人学習者の性格について気づいたこと、また担当している会話クラスの様子について述べてみよう。これについては、Hanan 2006で同様の分析を行っているが、再検討してみよう。

- ① 辞書 授業中に日本人学習者は辞書を使いすぎる。新しい単語や表現の意味を、筆者が教えても、必ず辞書を引く学習者がいる。おそらくエジプト人学習者の場合には、こういうことは考えられないだろう。日本人学習者はネイティブの教師よりも辞書の方を信用しているのだろうか。この行動は授業の時間を無駄にしているのではないかと感じさせられる。
- ② 失敗を恐れる もともとネイティブスピーカーではないのだから、失敗して当然なのだが、日本人は非常に失敗を恐れる。授業中に積極的に手を上げたり、質問したりする学習者がほとんどいない。逆に、授業が終わった後に、質問する学習者が大勢いる。そのとき筆者は学習者に、あなたと同じように疑問に思っている学生がほかにいるかもしれないから、次回からは授業中に皆の前で聞いてくださいと注意する。
- ③ 内気な性格 日本人学習者の何人かは「日本語でも会話するの

1 Kristen Brustad, Mahmoud Al-Batal, and Abbas Al-Tonsi, *Al-Kitaab fii ta'allum al-'Arabiyya with DVDs, Part One (A Textbook for Beginning Arabic Part One)*. 2nd ed. Washington, D.C.: Georgetown University Press, 2005.

2 Abd El-Rahamaan El-Fawzaan, Mukhatar El-Taahir, and Muhamed Abdel Khaliq, *El-arabiya Bayna Yadayika, Part One*, Saudi Arabia: Arabic for All.

3 Jack Smart and Frances Altorfer, *Arabic*. London: Teach Yourself Books, 2001.

4 奴田原睦明、榮谷温子【共著】、『こうすれば話せる CDアラビア語』、朝日出版社

はあまり得意ではない」と言う。このことはエジプト人に日本語を教えた14年間の経験の中では経験したことがなかった。内気な性格の学習者の場合、なかなか発話しないし、コミュニケーションもしないわけだから、外国語会話能力をどのようにして高めればよいのか教師が頭を悩ませる問題の一つである。

- ④ 会話よりも文法を気にする 会話を教えているとき、日本人学習者は話すことよりも、動詞の活用などの文法の方に神経を使っていると思う。筆者がエジプトで英語を習い始めたとき、最初の一ヶ月は口頭練習のみをやっていた記憶がある。おそらく日本人学習者の頭には文字や動詞の活用などの形の方がまず頭に浮かんでくるのだろう。
- ⑤ 消極的 エジプト人の場合は、もし大学などで日本人を見かけたら積極的に日本語で声をかけると思う。クラスで習った外国語を生かしてみたい気持ちがあるからだろう。おそらく、一般的に言うところエジプト人は外国人に昔から慣れていて怖がらないからかも知れない。一方、日本人にはそのような傾向があまりみられない。大学の中でアラブ人留学生を見かけてもあまり声をかけないと思う。おそらく外国人に話しかけるのを怖がっているからだといえる。

### 3.4 文化の違いによるトラブルの事例の紹介

日本人にアラビア語の会話を教えているときに気付いた、文化の違いによって発生するトラブルの事例を七つ紹介する。

- ① イスラムに関する表現 アラビア語では、イスラム文化と係わっている表現がよく使われる。たとえば、「アッラーのおかげで」や「アッラーに感謝しています」(al-hamd lil-lah)などの表現である。しかし、日本人がアラビア語を話すとき、これらの表現がなかなか出てこない。その理由を、学生に聞くと「イスラム教徒ではないのにこれらの表現を使ってもいいのか」と答えることが多い。日本人の認識では、イスラム教徒ではない場合には、モスクを訪ねたり、イスラム的な表現を使ったりしてはいけないようだ。しかし、イスラムに関係する表現をあまり使わないのは、アラビア語としては少し不自然な感じがする。
- ② 親戚の呼称 日本人が親戚に関するアラビア語表現を間違え、エジプト人としては違和感を覚えることがよくある。例えば、自分の母について話す中で登場してきた姉妹のことを「母の娘」と言ったり、結局は自分の親戚でもあるのに「お婆さんの親戚」と言った

りする。アラブでは自分の母親が再婚して子供を生んでも、生まれてきた子に対して妹とか弟という言葉を使い、自分のお婆さんの遠い親戚に対しても親戚と使う。

- ③ タブー 日本人は、エジプト人（アラブに共通するかも知れない）にとってタブーである男女関係の話題について、平気で話せる。それゆえ「日本人はモラル（道徳）がなくて恥知らず」とエジプト人に誤解されると考えられる。
- ④ 週の始まり エジプト人側のトラブルの項でも述べたように、エジプトでは週の始まりは土曜日で、週末は金曜日である。日本人もエジプト人と同じように、週の始まりと週末の言い方を間違えることがある。
- ⑤ 呼称 これも、エジプト人側のトラブルの項で述べたように、エジプトと日本では人の名前呼び方が異なっており、エジプトの場合はファーストネームで呼ぶことが普通である。このことも日本人学習者に影響を及ぼしている。例えば、筆者の正式名、ハナーン・ラフィークのラフィークは父の名であるが、これを姓と誤解して、日本では筆者のことを父の名前か祖父の名前で呼ぶのである。筆者はエジプトでは男性の名前で呼ばれたことがないので、最初は自分が呼ばれていることに気がつかなかった。相手国での名前呼び方についても学習者に教える必要があると思う。
- ⑥ 日本語特有の表現 日本人が、日本語のあいまいな言いまわしや、省略されている返事の仕方を、そのままアラビア語でも表現しようとする、誤解される恐れがある。つまり、日本人が、アラビア語でもあいまいな言い方をしようと考えてしまうことで、アラブ人に誤解される。
- ⑦ 兄弟の数え方 これも先ほど述べたように、エジプトと日本では兄弟の数え方が違って、このことも日本人学習者に影響を及ぼしている。

### 3.5 考えられる解決方法

上記のようなトラブルの、総合的な解決方法として「ビジター・セッション」を考えた。ビジター・セッションとは、教室に、教師以外に母語話者の「ビジター」を招き、学習者に言語を使用させることを目的とした一つのアクティビティーである（横須2003）。

東京外国語大学においても、日本人アラビア語学習者に刺激を与え、会話能力を向上させる目的でビジター・セッションを何回か実施

した。これについての報告は Hanan 2006 で行っているが、再検討したものを述べてみよう。

ビジター・セッションのあと、学生のレポートを読むと、セッションによる影響は大きく、セッションが言語の面だけではなく相手の文化理解にも役に立ったことが判明した。例えば、ある学習者は「アラビア語以外で改めて実感したことがある。きれいごとかもしれないけど、それは、宗教とか国とか違ってみんな同じ若者で、同じ人間だということである。宗教、文化、国際関係などについて勉強することはとても重要なことであるが、それ以前に、私は、文化や宗教とか細かいことは関係なく、ただ単に皆と仲良くしたいと思うのである。」と書いていた。

次に、ビジター・セッションを実施したことによって現れた成果を簡単にまとめる。

- ① 日本人学習者は自分の問題点を自覚した。自分の「語彙不足・会話力不足」などについて自覚して反省し、解決方法を考えて自分で計画を立てた。また、セッションの前、特に1年生の学習者の中にはアラブ人のビジターに何の質問をすれば良いのか分からない様子を見せた者もいた。しかし、その学生がセッションの後では「今度この質問をしたいから、この表現を教えてほしい」とか「～の場合の表現は何か」とか「～音の発音をもう一回練習したい」などの積極的な質問がくるようになった。
- ② 日本人学習者はコミュニケーションを上手にとるためには「怖がらず、あまり細かいところにはこだわらず、間違ってもいいから話そう」とする態度が重要だと気づいた。例えば、ある学習者が「ビジターの話を全部しっかり聞き取れたわけではなかったけれど、あまり細かいところにはこだわらないようにしたら話題についていくことが出来て、またグループ全員で会話に参加し、会話をどんどんつなげていくことができた。」と書いてくれた。
- ③ セッションを通して学習者の間にイスラムに対するの興味がわいてきたようである。彼らは異文化理解に必要な第一歩を踏み出したのではないかと考えられる。ある学習者は「今回のセッションを通じて様々なアラブへの疑問が解消されるとともに、新たな疑問も見つかった。」とレポートに書いていた。
- ④ 日本人学習者は「自分の文化」、即ち「日本の文化」の良さに気がついた。またアラビア語で日本を紹介したいと思う学習者が大勢

いた。例えばある学習者は「日本人なのに日本のことをあまり知らないと思った。海外でも日本のことを正しく伝えて理解してもらうことが大事だと思うので、日本についてよく知り、それをアラビア語で説明できるようになればいいと思う。」とレポートに書いている。

- ⑤ セッションの実施が学習者にマイナスの影響は与えなかったといえる。セッションがアラビア語の勉強の励みになったのではないだろうか。例えば、ある学習者が「恥ずかしくてくやしい思いができたのも、私にとってはいい薬だったかもしれない。」と書いている。

以上はセッションの成果の簡単なまとめである。次に、今、直面しているセッションの実施に対しての問題点を説明する。

- ① 日本人学習者のレポートを読んで、日本人側はビジターの年齢にかなりこだわっていることが分かった。つまり日本人にとっては同じ年齢のビジターの方が話しやすいらしい。考えてみると、日本人はエジプト人と違って、年上の人とも年下の人ともあまり友達の関係になれない。ビジターの年齢の条件を満たすには、アラブ人留学生に頼らざるを得なくなる。
- ② 東京外国語大学の予算の関係でアラブ人留学生の人数が減少した。それゆえセッションに参加してくれるビジターを見つけることがさらに難しくなり、ビジターを選ぶ余地もなくなっている。またビジターへの謝金の予算にも問題が生じている。
- ③ セッションは学生自身による事前の準備が必要である。もし学習者がその準備に積極的に取り組んでいないと、折角のセッションが台無しになってしまう。

#### 4. エジプト人日本語学習者と日本人アラビア語学習者の共通点

今回の事例のエジプト人日本語学習者と、日本人アラビア語学習者の、状況的な共通点として、学習者の年齢がほぼ同じであること、大学に入って初めて今まで習ったことがない、新しい言語に挑戦すること、そして、自国における目標言語の「輪の狭さ」が挙げられる。

最後の「輪の狭さ」とは、両国の学習者にとって、教室以外で目標言語や（目標言語の）環境そのものに触れる機会は稀なことである。つまり、日常的に目標言語が使える環境が整っていない。したがって、学習者は目標言語を教室以外では使えず、この言語は授業中だけの言

語になっている。このように目標言語の輪が狭いために、学習者が、せつかく習った言語を実践的に使う機会がほとんどないのである。また、このことによって日本またはアラブの国と縁を持つことはなく、日本またはアラブの国の生活や文化に対する興味を保ち続けられないという状況に陥る危険性がある。

## 5. 結論

外国語教育において言語技能を高めるためには、異文化コミュニケーション能力を高めることが求められる。異文化コミュニケーションについて伊原（1993：5）は「異文化間コミュニケーションはまさしく文化の違いが意味をもつという大前提に立っている。従って、異文化間コミュニケーションを円滑にするには、コミュニケーションを行う双方が、自他の背景にある文化固有の物の見方、風俗習慣、行動様式等を理解し合うことがどうしても不可欠ということになる。」と述べている。本事例に即して言えば、「エジプト人に日本語の会話を教える」ときと「日本人にアラビア語の会話を教える」ときに、学習者に目標言語の文化的背景を紹介する必要があるということである。言語の文化的背景を紹介するには学習者には生の資料を見せたり、目標言語の母語話者との接触場面を作ったり、クラスで出てきた表現の文化的背景をできるだけ教えることが確かに役に立つ。そして、これらの手段の中で最も効果的なのが、「接触場面」、つまり「ビジター・セッション」であろう。なぜならば、ビジター・セッションでは学習者に直接的な言語使用を体験させることで、言語教育の面で役立つだけでなく、異文化も直接体験できるからである。

ホール（1993）は、他文化こそが自文化の評価基盤として機能するので、他文化の論理の枠組みの正当性を認識して初めて自文化を本当に理解するのであると言っている。ビジター・セッションによって、学習者は他文化に気づくだけでなく、自文化の良さにも気がつくことも確かである（Hanan 2006）。

学習者の誤用は母語の影響によるだけでなく、学習者が習得した目標言語体系は、学習者が独自に作り出したもので、そこに母語の影響はないとも言われる（迫田2001）。また、教師による教え方や説明の仕方が原因である場合や、学習者自身による推測の誤りもある（小林2001）。ただ、誤用の要因はさまざまとしても、学習者の目標言語には、母語の影響が明らかに見て取られるものがあることは否定で

きない (Lado1957、相本2005ほか)。今回の「エジプト人日本語学習者」と「日本人アラビア語学習者」の目標言語の会話習得の場合も自文化背景が影響していると考えられる。

エジプトをはじめ中東文化圏と日本の文化圏は、欧米の文化圏と異なり、学習者にまず相手の文化圏の異質さと、その学習の難しさを認識させる必要がある。また中東と日本とは、地理的にも遠く、学習者に目標言語の使用される輪が狭い。この輪の狭さが「エジプト人に日本語を教える」と「日本人にアラビア語を教える」ことを難しくしている。日本語会話教育上の問題点とアラビア語の会話の教育上の問題点の大部分は、目標言語の輪を広げることによって解決できると考えられる。これらのために、ビジター・セッションが有効である。

今後、望まれることは、目標言語の輪を広げるために接触場面をもっと増やして学習者にとってのビジター・セッションの大切さを理解してもらい、ビジター・セッションをより多く実現できるように、予算も含めて、条件を整えるようにしていくことだと思う。

### 参考文献

- 青木順子『異文化コミュニケーションと教育－他者とのコミュニケーションを考える教育－』溪水社、1999年。
- Brustad, Kristen, Mahmoud Al-Batal, and Abbas Al-Tonsi, *Al-Kitaab fi ta'allum al-'Arabīyya* with DVDs, Part One (A Textbook for Beginning Arabic Part One). 2nd ed. Washington, D.C.: Georgetown University Press, 2005.
- Hall, E.T. *The Silent Language*. Garden City, N.Y.: Doubleday, 1959. (國弘正雄・長井善見・斎藤美律子訳『沈黙のことば－文化・行動・思考』南雲堂、1966年。)
- Hanan Rafik Mohamed 「日本人アラビア学習者のビジター・セッション－実践報告－」. 『東京外国語大学論集』2006年、Vol. 72, pp. 171-188.
- ホール、E. T., 岩田慶治、谷泰(訳) 『文化を超えて』TBSブリタニカ、1993年。
- 伊原巧 「英語による異文化間コミュニケーション能力を高めるための題材のあり方－日本、中国、韓国の教科書比較を通して－」 『外国における言語教育の教科書の分析－異文化理解教育

- の向上をめざしてー』信州大学教育学部英語教育(出版社)、1993年、pp. 1-17。
- 小林典子『日本語学習者の文法習得』大修館書店、2001年。
- 久米昭元『異文化コミュニケーション研究法』有斐閣ブックス、2005年。
- Lado, Robert. *Linguistics across Cultures. Applied Linguistics for Language Teachers*. Ann Arbor: University of Michigan Press, 1957.
- 迫田久美子『日本語学習者の文法習得』大修館書店、2001年。
- Smart, Jack and Frances Altorfer, *Arabic*. London: Teach Yourself Books, 2001.
- 梶本総子「『作文対訳DB』を用いた誤用と母語干渉に関する研究の可能性ードイツ語母語話者の日本語作文とそのドイツ語訳をメインデータとしてー」『日本語教育連絡会議文集』日本語教育連絡会議事務局、2005年、Vol. 17、pp. 25-31。
- 横須賀柳子「ビジター・セッション活動の意義とデザイン」『接触場面と日本語教育』明治書院、2003年、pp. 335-352。